

●高澤良一 第九句集 寒暑

●一月―三月

むらぎもの据り処を歳旦吟

寝床にて初刷バリと鳴らし読む

銀鼠に空の整ひ大旦

正月は黄泉にてと又一人逝く

なまはげが立去り蓑の零れ屑

持ちのよきラジオより洩れ御万歳

新橋の飲屋の鏡開かな

新橋の似たやうな路地松飾り

腫れものも湯に温もりて三ケ日

初湯舟湯口近くに身を沈め

ほうと息大きくついて初湯舟

いつぽんの白長睫毛初鏡

フェリー安房(保田 嵯峨山 江月)接岸初声の飛び交へる中

乗初の安房へフェリーの始動音

乗初めのフェリーのうねり臍の浮く

船室のノブの輪飾り風に鳴り

遊び田のうすらひつつく三日かな

水仙に句帖をひらく男かな

水仙は今年早くてその見頃

地下街は何處へも通ず松の内

餅花に財布の紐のゆるみがち

旧正の髯を振り振り鯉寄り来

郊外に出て一月の風の富士

枯萱に磧のだだっぴろき空

七福神巡りのバスが停まる寺

赤城山一ツ年取る面構え

林に雪田に雪村に残る雪

塩原行年立てる音も新たに箒川

箒川鴨横向きに流されて
鶺鴒か雪の川原をすつ飛んで
白鶺鴒とんと川原の雪醒まし
露天湯へどぼんと入らねばこごえちまふ
顔擦って川原の雪気野天風呂
野天風呂あさ晨の雪気も何のその
宿泊簿記す傍ら鏡餅
湯の里に遊ぶ正月湯三昧
山の温泉ゆに骨抜きとなる三ケ日
温泉三昧はたして鼻風邪心地かな
雪明りして岩風呂の岩の相
初湯殿ふぐりすうすうしたりけり
初湯舟五體の透けて栓いろ
青年が湯壺へどんと初湯波
元日の湯花透く日のあらたふと尊
湯の町の明けて三日の川床鳴る
初商温泉まんじゅう湯気しゅっしゅ
雪まろげ男まさりの女の子
箒川べりの湯宿の初灯
氷柱宿暇つつぶしに夜更けの温泉ゆ
大地より温泉ゆの湧く鼓動はこべ草
身構へてその前通る軒氷柱
炬燵一つ真ん中に置く間取かな
隆々の鬼の金棒軒氷柱
雪降れば湯気倍にして饅頭屋
助っ人に山の快晴雪卸す
根雪道ここでこ転けたら百年目
温泉場雪搔き根雪ひっぺがし
段差また段差根雪の温泉場
きっかけは向うの岸のしづり雪

妙雲寺
雪中の堂縁近く牡丹の木ボク

雪みちを二代目高尾の墓へつけ
塩原高尾辞世句 寒風にもろくもくつる紅葉かな
雪に上に高尾ゆかりの寺紅葉

七草の朝湯あとから利いてくる

初芝居梅沢某の股旅もの

初芝居苦節うん十年の面つら

金沢文庫海岸
左義長の風向きをみて火付け方

とんど火の最初パチパチやがてバン

左義長の灰降り慌てて髪押さふ

きな臭き世の左義長の大ほむら

左義長の爆ぜて松・竹・櫛の音

左義長の火疲れといふ面持ちす

凧上げの下手も上手も先づ走る

凧上げの子の渚まで一目散

いかのぼり
凧 遂に風向きとらえたる

凧平衡感覚使ひけり

凧の尾のながながしきを誇りとす

砂浜に落ちて砂噛む奴凧

賀状来ぬテレビをテレヴィと書く世代

お白州に詰めゐるところで初夢覚め

これとても着水の裡鴨滑る

洋蘭展
蘭展へ軽き足取り銀座まで

妃殿下の出品の蘭とつつきに

蘭展の蘭の招きにあづかりぬ

洋蘭の種を明かさぬ咲かせ方

蘭展の客層もまた見ものなる

奇天烈も奇天烈蘭の仲間とよ

場違ひのやうにおもへる蘭展に

洋蘭展鼻が華やぎ始めけり

蘭展出で銀座通りの人となる

みそさざい寝床ばなれも潔く
定下田稔さんかなり得難き人と枇杷の花
聴診器こんどは背中初検診
護謨の木にぎっくり腰の愚痴零す
暴君の腰痛なだめ寝る寒夜
蒲団出て月面歩行ムーンウォークのぎっくり腰
こらへみる噓怖しぎっくり腰
ぎっくり腰咳く図は曾呂利新左衛門
ぎっくり腰感極まらば嘔らん
ぎっくり腰遅日の電話鳴らせおく
湿布して氷河期迎ふぎっくり腰
旧正の妻の手を借りぎっくり腰
ぎっくり腰悪寒は颯のやうにくる
腰痛に利く温泉ゆがあらば天竺まで
腰痛に竜の落し子めく歩行
腰痛の一撃脳天真っ白に
襦袍被てぎっくり腰の言ひなりに
暖房がどかんと入るにぎっくり腰
時かけて苺をつぶす腰痛持
腰痛の抜けず日差しは春めけど
金柑のありたけ点る観音堂
ぶらんこの下の余寒の水たまり
暖房音せはしく朝が始まりぬ
替る替る臘梅に鼻持ってゆきぬ
咲くときは一緒と梅の賑やか好き
校庭の水十賊不動仙しんと授業中
青空に銀嶺走るだるま市
丹沢山系新らの雪置きだるま市
だるま市行きの増発バスぎうぎう
市の日が眩し目無しの達磨にも

白鳥が来るやうになり本埜村
白鳥の青空目がけ翔つ十字
白鳥の飛来足掛け十五年
白鳥をかぞふる頭揺れゐたり
白鳥のために屑菜を切つて遣る
青空より枝下ろされてユリ並木
三極に日照時間伸びて来し
江ノ島の裸弁天東風吹けり
雑談の合間に鴨の移りをり
税務署の窓越しに見る鴨の池
確定申告済ませ鴨見て帰らなん
春水といふ輝きに不足なし
水音みおとまたおろそかにせず春の水
小さき段差ありて水鳴る春うたた
春の水鳴るか鳴らぬか身を屈め
犬ふぐり浴びる旭の真新し
きさらぎの暦を切つて落しけり
白加賀の老来ますますかほる花
箸置きしの陶のひひなも飾りけり
雛飾る妻は件の手付きして
さしあたり雛の調度を並べみん
恋猫の恨みがましきこゑ収め
恋すてふをみなの猫の富士額
垣繕うことも根氣の続くうち
桃・満作咲きてとんとん拍子の春
満作の花ろうたげな氣息かな
日向水木連翹の黄を眨めて
耳たぶに岸辺の日差し水ぬるむ
満作の昼素通りの郵便夫
山茱萸と云へば和菓子の黄味しぐれ

犬ふぐり屯す郵便受の下
接骨木咲くぼつぼつ旅に出るのもよき
春鷗がやがやフェリーターミナル
ひつじ田のほとりで列車列車待つ
房総花摘み部落の春の襖を引きにけり
ストツクの畑裾蛇口起ち上がる
金魚草摘み居る処に団体客
花作りホース引き込むポピー畑
土地人に教はり花菜に沿ふ径
まんぼうの走り廻れる花菜の沖
花摘みの鋏曇れり花渋に
隣り村ぺんぺん草の畦往けば
畑ほとりより出す花菜の宅急便
矢車草風出て潮色急変す
男来て三脚降ろす花菜畑
芹の水女のそれと跳ぶ声す
春めくやまんぼうの絵の防波堤
船室にあらせいとうの香の満てる
日持ちよき安房金盞花仏壇に
あらせいとう三日ばかりをかほる家
満作の小出しに咲ける臆病花
動物園上野動物園児の点呼うさぎの前
春眠のゴリラの地下足袋めく蹠
日向ぼこするコンドルに成り下がり
徘徊す虎は四温の毛皮被て
蟻喰いのそはそは春の土を嗅ぎ
姿見の在らばとおもふ丹頂に
春水に河馬のうたた寝四六時中
胡座かく蜥蜴はこうもり安のさま
花ミモザ羅馬軍団現れよ

日に痴れし山茱萸日々の眺めとし
餃子リヤンコと注文入れる春の飯店
月ヶ瀬梅林うばい
極上の烏梅を産す梅どころ
奈良晒三寒の糸織りかけに
修二会修二会
仏都奈良馬酔木が咲けばお水取
お水取近づく空を風の行まきよう
水取に少し間のあり鹿せんべい
お水取ホカロン売り込む茶屋親爺
板東者我ら修二会に参じたり
修二会見物茶屋の親爺が先導す
お水取諸注意を先づ奈良県警
水取待つ人の頭かしらのぐらぐらと
チヨロ松明まつが三本上がる二月堂
修二会僧大松明をぶん廻し
老若の目鼻ふすぼるお松明
お松明拜火教徒にあらねども
お松明招福火の粉撒き散らし
火の粉浴び修二会警護のおまわりさん
お水取肩の火の粉を払ひ呉れ
水取といふ営みのとこしなへ
劫初の火劫初の水のお水取
声つぶる僧の声明お水取
くらやみのなかの相伝お水取
お水取矢来を焦がす粗火の粉
千年の口伝が生きてお水取
行僧のいっしょうけんめいお水取
お水取上堂松明天華とす
お水取耳で観みること覚えけり
決めた事決めた通りに諸葛菜
長閑な昼煙草はラッキーストライク

室咲きの地味でゐて興そそる花
雛罌粟の蒼の考え深げなる
諸葛菜些事より他に無き老後
蠅生まれ四辺にはかに活気づく
待春の肱付き椅子の深さかな
郁李は見る人に見ゆそんな花
東横線すれすれに咲く白もくれん
や金沢文庫 称名寺つと春やつと水皺頭てる池
近寄る程白木蓮の生の色
芹摘みにこゑ掛け遣れば佳い返事
一寸だけ春めく山の花きぶし
蝌蚪探す野蒜摘みには飽きたと見え
破れ傘こころ辺りとおもふ辺に
破れ傘控え目といふ出立ちに
破れ傘ことし見損じなかりけり
含羞の一つの容破れ傘
物の怪の何時離れたる破れ傘
啓蟄の三脚を取り敢えず置く
被写体とするには動き過ぎる鴨
弁財天日永巳の日の銭洗ふ
銭洗しろへびさま弁天春は巳の日の験げんあらな
穴出でし蟻目をこする祠の辺
日永の土佐路面電車はリスボン製